

れた。Palazzo Bianco は、その後その藏品とともに、
Galliera 公夫人である Maria Bignole Sale の遺志によ
り、Genova 市に奇贈され、一八九二年コロンプスのアメ
リカ大陸発見四百年祭にこの館で美術展が開かれたが、以
後この館は、一般に公開されるに至った。

以上この像に接することができたことを報告するとともに、この像に関して、The Wellcome Building にある青銅像の説明文を始め、いくつかの文献に、矛盾する記述のあることを指摘し、新たな事実を示した。

なお本像は、極めて写實的に表現されており、ジェンナーの鋭い眼差しと、幼児のあどけない表情が、美事な対比をなして、見るものに深い感動を与えるものであった。

(大阪大学微生物病研究所)

中国における「医は仁術」の起源

山本徳子

わが国で、諺としても知られている「医は仁術」なる語句の原典は、中国のものによるとされている。それは、宋代に張杲の著わした『医説』が、明代において出版される際に康馮彬の書いた序文の中に存するというのである。すなわち、次の通りである。

蓋医仁術、而安老保幼防己、濟人之道備焉。さらに、その倫理的な面について述べたものが、同じく明代に著わされた徐春甫の「医本仁術」(『古今医統大全』卷三)であると
いわれており、次のように記されている。

医以活人為心、故曰医仁術。有疾而求療、不啻求救焚溺
於水火也。医当仁慈之術……、従事者可不鑒哉陸宣公論

これによると、徐春甫の「医本仁術」の論述は陸宣公の論に因っていることがわかる。

陸宣公（『陸贄、七五四〜八〇五』）は唐代の政治家で、徳宗の時に宰相として活躍し、文集『陸宣公全集』がある。のち、讒言によって忠州に左遷されたが、その時、土地の人が多く癘疫を患っていたので、それに対する処方を集めて『集驗方』を著わした。新旧両唐書の陸贄伝および新唐書芸文志には『陸氏集驗方』として著録されているが、宋史の芸文志以降にはみられず、早く散佚したもののようである。

ともあれ、「医本仁術」なる論の根源は唐代に遡り、陸宣公の文集を考究しなければならないことになる。しかし、『陸宣公全集』の中には、そのようなことに関した論述は見当らず、巻首に、後人が、陸宣公の「論、数十篇、みな仁義に本づく」と称していることが知られるのみである。『集驗方』は明代には存せず、徐春甫は見られなかったはずである。そのことは、『古今医統大全』の「陸宣公衷方書」に

陸宣公在忠州、衷方書以度曰。非特假此以避禍。蓋君子之存心、無所不用其志也。……近時士大夫家藏方・或集驗方。流布甚広。皆仁人之用心。……予屢欲為之、恨藏書

不広。……亦濟物之一端也（医説）

とあり、末尾の『医説』に因つてゐるとの記載から知られるよう。確かに、同じ文が『医説』巻二に「陸宣公衷方書」として著録されている。宋代の張杲は恐らく『陸氏集驗方』を見たのではなからうか。そして、陸宣公が方書を集めたことに関連して、右のようなことを述べたものと考えられる。その中で、今時の士大夫が家に方書や集驗方を蔵していることを指摘し、このことは、仁人の心を用いることだといひ、さらに、このように処方集を備えているものは、仁を好む士である、と、次のように述べている。

好仁之士、有濟物之心、或蓄一驗方、或有一奇藥。……

（『医説』・「施藥」）

医者に対しては、慈仁でなければならぬ、という。すなわち、

医者不可不慈仁、不慈仁則招禍（病不可治者有六疾）

とある。そのような医者の治療の状態について、「医者は、人身の疾苦を我れと同じに思つて対処し……。貴賤・貧富に関わらず、人を救うことを心せよ。人の急に乘じて財を求めるのは用心不仁である」と述べている。

医者当自念、云人身疾苦与我無異、……：勿問貴賤、勿
挾貧富、專以救人為心。……：乘人之急、故意求財、用心
不仁。（『医以救人為心』）

このように、徐春甫の仁術論の基づくるとされる陸宣公論
から『医説』に遡ってみていっても、医は仁術なることを
説いたものは見当らない。

では、医は仁術、と説くのは、やはり、明代に端を発す
るのであろうか。否、ここに見落してはならないのは、
『医説』の康馮彬の序文に対して跋の存していることであ
る。

南宋の江疇の跋（開禧三年、一二〇七）によると、人之疾
病、不得尽其理、而死者亦衆、然豈真無良医耶、不仁之
心壞之也、……：季明又能力学以求古人之用心。則凡有可
以広人之聞見、使其知所趨避以自免於疾。与夫參稽已驗
之効、有疾而自能処其疾、不為庸医所誤。是季明之仁術
也。……：其仁民之心又当如何耶。

とある。すなわち、季明（＝張杲）は、「よく勉強して古人
の用心を求め、聞見を広くすることなどから、疾病を免れ
ることを知り、已驗の効を参考にして疾病に対処した。：

……：これこそ季明の仁術だ」という。そして、「これは民を
いつくしむ心である」というのである。

ここには「医は仁術」という表現はなされていない。し
かし、「医」という言葉は省かれてはいるものの、季明の
医者としての行為からは、当然、医は仁術、ということが
述べられているものと解される。そして、明代において出
版される際に、『医説』の本文と跋とを併せ読んだであろ
う康馮彬が、序文を書くに当って「医は仁術」なる語句を
用いたのではなからうか。

このようなことから考えられるのは、「医は仁術」につ
いての起源は、唐代を経た宋代に求められ、それが、明代
において成文化されたのではなからうかということであ
る。

（横浜市立大学医学部医史学教室）